氷の王妃

素子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷の王妃

【Ｎコード】

Ｎ４４９０Ｚ

【作者名】

素子

【あらすじ】

氷の王妃とあだなされる、泣けない女が泣けるまで。

01　空虚

夢の中で何かを必死に探していたような気がする。気ばかり焦って、でも探し物は見つからなくて、そのうちにずきずきとする痛みに取って代わる。

するりと何かが去っていく気配がした。引き止めたくて必死に手を伸ばしても何も掴み取れない。呼びかける声は水の中のように不明瞭だ。

待って。お願い、行かないで。私の――。

「お目覚めですか」

聞き覚えのある声に見覚えのある景色。ここは寝室で呼びかけた侍女のエルマが目を赤くしている。何故日の高いうちから寝台に横たわっているのだろう。

常に情報を得て状況を把握して立ち回ることが染み付いているクリスティーナは、いつもと同じように質問しようとした。

そちらに顔を向けて起き上がろうとして、ひどく背中が痛むことに気付く。

「わたくしはどうしたというの？」
「王妃様、昼間に階段から転落なさったのです。それで……」

いいよどみ、涙を流す様子で理解する。すうっと血の気が引いていくのが分かる。寝ていなかったらおそらく倒れていただろう。途端、痛みが耐え難いものになる。同時に下腹部にも違和感を感じた。

無意識に上掛けの下で腹部に手をやり、クリスティーナは感情をのせない声音で侍医を呼ぶようにとエルマに申し付けた。

「ご気分はいかがですか」
「背中と腰が痛むほかは――。駄目だったのですね？」
　初老の侍医はてきぱきと質問をして診察をし、目的にかなった薬を用意していたがクリスティーナの一言でその手を止めた。そして改めて腹部の診察をはじめた。
　クリスティーナは黙って身を任せる。診察が終わって手を洗った侍医の目には同情の色がある。それでもきちんとした回答をよこした。

「お気の毒なことです。今回王妃様は腰を強打されました。今後のことは現段階では予測は難しいのです。ただ、何とも申し上げにくいのですが、次に妊娠される可能性は低くなったかと存じます」
「そう、陛下のお子を流した挙句に今後の妊娠も難しい。そう言うことですね？」
「仰せの通りにございます」
「分かりました。――少し、休みます」

　寝る前にと痛み止めだけを飲むようにと指示して侍医は寝室を出て行った。
　待ちかねたようにエルマが近くにくる。それまでも抑えた嗚咽は聞こえていたが、今は誰はばかることなくぼろぼろと泣いて、握り締めている手巾が随分と重くなっている様子だ。

「王妃様、おいたわしい。あの階段に油が塗ってあったのです。きっと側室の――」
「滅多なことは言うのもではなくてよ、エルマ」
「ですが王妃様がお倒れになって大騒ぎしていた最中、私も慌てて階段を下りたのです。その時に足を滑らせました。この目で油が塗られているのを見ました。指でも確認をしたのです」

クリスティーナの頭にその時の様子が浮かび上がる。ようやく気分がよくなり、今を盛りに咲いている花を見ようと庭園に行こうとして、階段を下りていたのは間違いない。

その中ほどで急に足を滑らせたのもだ。あとは一瞬のことで景色がめまぐるしく変わったこと意外は覚えていない。悲鳴すらあげた覚えもなかった。

とっさに手すりを掴もうとしてかなわずに、空を切った自分の手だけを妙に覚えている。

「張替えのためにと絨毯をはがしてありました。そうでなければ王妃様が転落なさることもありませんでしたのに」

エルマは悔しさのあまりに身を震わせる。

対するクリスティーナはその情報を組み上げる。であれば準備期間を設けての周到な計画に違いない。王族専用の階段。クリスティーナは妊娠してから中央ではなく端を下りるようになっていた。それを知っていて準備のできる人物。

侍医を買収できなかったから実力行使に出たという線か。城の実務を担当する者に今回の立役者がいる。出自や縁戚などを組み合わせればきっと一人の人物に行き着くはずだ。

直接の指示は側室の令嬢ではなく父親の侯爵だろう。

内心で冷笑が浮かぶ。後ろ盾のない王妃でもそれが子供を産めば影響力は小さくない。お飾りの王妃と安心していたところに今回の妊娠が発表されて、城内に少なくない騒ぎをもたらしたのは承知している。

未来の国王の祖父の立場を得るためになりふり構わずということか。

「陛下は？」
　クリスティーナの短い質問に、エルマははっとした顔を見せた。それだけで反応が察せられる。そう、いつものことなのだ。
「王妃様の意識がない間に報告がなされたと聞き及んでおります」
　その後は聞かなくても分かる。目覚めたときに侍女のエルマしかいなかったこと――それがここでの自分の立場を表しているのだから。
　おそらく報告を聞きはした。そして聞き流したのだろう。
　そうは思っても何の感慨もわかない。
「陛下には申し訳ないことになったけれど、安堵されたのかしら」
「王妃様っ、そんな」
　気色ばんだエルマが続けようとした時に、大勢の人の気配がした。
　手を上げてエルマを留める。はっと表情をひきしめた侍女は寝台の側から立ち上がって壁際に下がる。
　先触れもなく扉が開いて近衛を従えた国王が入ってきた。近衛を扉の内側に控えさせて、国王一人がまっすぐに寝台を目指し、隅に控えたエルマが先程までいた場所に立つ。
　国王は立ったままクリスティーナを見下ろした。
「子を流したそうだな」
「陛下」
「そなたが踵の高い靴を履いていたせいで階段から落ちたというのは本当か？」

冷ややかな声とともに、寝台に放り投げられた片方の靴をクリスティーナは見つめた。
子を宿したと知ってからは履かなくなっていた、でも以前は気に入りだった靴だ。他の靴と一緒に衣裳部屋に保管されているはずの靴。
クリスティーナの視線は靴から、国王へと移った。その視線は冷静だった。
「わたくしが履いていたものとは違いますが」
「階段下に転がっていたと報告の者が持ってきた」
内通者に掃除か衣装を担当する侍女が追加された。エルマが口に手を当てている様子から、彼女は内通者からは除外していい。
もっとも国元から同道した唯一の侍女なのだから、最初から容疑者にも入れてはいないが。
「陛下はどう思われるのですか？」
「事実は、そなたが階段から落ちて私の子を流した、踵の高い靴を残してだ」
「では、そういうことなのでしょう」
クリスティーナを見下ろす国王の表情が険しくなる。肩から腕に力が入り鍛えた体の線がいかつくなる。自分が男であれば殴られているかもしれない、とクリスティーナは感じた。
一瞬の激情を抑え込み国王は己を取り戻した。
「弁解もせぬか。そして泣きもしない。全くそなたには氷の王妃の名称が相応しい」
何をされても言われても表情を変えない。

北国から嫁いだこの色素の薄い王妃は、はじめは近寄りがたさから、そのうちに数々の噂話からいつからか氷の王妃と呼ばれていた。

今もその瞳は冴え冴えと国王を見つめている。そこには何の感情も秘めていないように見えた。

用件はそれだけとばかりに国王はきびすを返す。

その背中によく通る声が届いた。

「陛下、子供に関してはお詫び申し上げます」

「――もういい」

振り返らずに国王は出て行った。

重い音をたてて扉が閉まるのを待って、クリスティーナは細く長い溜息をついた。

エルマはおいたわしいと側で泣く。しばらく気の済むまで泣かせておいて、クリスティーナはエルマに告げた。

「休みます。薬をこれに」

寝台から起き上がれないので手を貸してもらって枕を何個も重ねて上体を起こし、薬を飲んだ。苦労しながらゆっくりと体を横たえてクリスティーナは目を閉じる。

エルマはそんな女主人の上掛けを整えた後に退出した。

「泣きもしない、か。泣き方などとうに忘れてしまっているのに」

抑揚なくクリスティーナは呟く。

この期に及んでも泣きもせず取り乱しもしない。――できない。

また氷の王妃という名称を補完する出来事が起きたと面白おかしく噂されるのだろうと思っても、何の感慨もない。

空っぽ。身も心も空っぽなのだと自覚する。

小国の王女が嫁いだ先は繁栄著しい、自国と比較すればまだ歴史の浅い国。

完全なる政略の上の婚姻に温かいものは通わなかった。冷えた関係を国王は隠しもせずに自国の貴族から側室をめとった。以降、あからさまではないにしても周囲はよそよそしく、それをよろうための冷静さは、情の無い冷たさと受け取られる。

ようやくできた子供もこんなことになって。

お腹は平らだったがつわりはあった。それでここに子供が、国王陛下との子供がいるのだと実感できていたのに、今はお腹の中が空っぽなのだ。

身内にあったくすぐったさや温かさは、空虚感と痛みに取って代わられている。喪失感が大きく考えることすらおぼつかない。

ここに在ったものは消え去って戻らない。

「ごめんなさい」

何もつかめなかった手を見ながらぽつりとこぼす。

クリスティーナの謝罪の言葉は誰にも聞かれなかった。

02　見舞

国王ランドルフは朝から執務に追われていた。午後は隣国の使者と会談した後に城下に足を伸ばす用事もあって、早い時間から書類と格闘している。疲れも見せずに内容を吟味し、必要なら宰相や補佐官からの助言などを取り入れつつ、ようやく最後の署名を終えた。
眉間を指でもみほぐしながら、顔を上げるとちょうど間の悪いところに補佐官が新たな書類を持ってきたようだ。仕事を終えたと思った瞬間に持ってこられるほど腹立たしいものはない。
ただ、その不機嫌を補佐官にぶつけるわけにもいかないので、ランドルフはその書類を受け取った。

「これは？」
「王妃様のご病状を侍医が報告したものです」

真面目な顔になりランドルフは書類に目を落とした。詳細な報告書は何枚かあり、それにじっくり読んだ後でランドルフはぎし、と椅子に背を預けた。高い天井と精緻な装飾を見上げその目を閉じた。
宰相がいぶかしげな声をかけた。

「陛下？　王妃様のご容態はいかがでしょうか」

あの日以来王妃は寝台から離れることなく療養を続けている。食事も寝台で取っているらしく、側には国からつれて来た侍女が絶えず控えている状態だ。寝室に入れるのはごく限られた人物のみ。
そんな一人である侍医の報告書を宰相に手渡しながら、ランドルフは告げる。

「まだ少量の出血が続いているらしい。微熱もあるそうだ」

王妃が懐妊して――流産したことはまたたく間に城内に広がった。ランドルフがクリスティーナを迎えて数年、ようやくのことだけに人々は注目し関心をよせていた。側室との間にも子は設けてはおらず、順調にいけば第一子のはずだったのに。

「それは……さぞお辛いことでしょうな」

「どうだろうか。私が行った時はいつもの顔だったぞ」

冷たい人形のような王妃の姿を思い出し皮肉な笑いが浮かぶ。

北国特有の色の白さと色素の薄さで隙なく振舞われると、ひどく人間味が失せているように感じられる。靴を寝台に放り投げて責を問うた時にも、いつもと変わらずに氷河のような薄青い瞳で見つめ、抑揚の無い声で返答した。

子供を亡くしたばかりとはとても思えない感情の起伏のなさだった。

「案外、私の子供など産む気もなかったのかもしれぬ」

「陛下、そのようなことは……」

「戯言だ」

聞いている者が宰相しかいないから漏らせる本音でもあった。自分にすら亡くした子供へのいくばくかの感情はあるのに、当の本人に気配が感じられないことがランドルフの苛立ちを誘っていた。

ただこの手のことは決して本音を漏らしてはならない。様々な思惑や憶測をのせてすぐに話は広がる。国王自らの発言となれば、『事故』が『故意』になりかねない。

王妃本人はどう捉えるか知ったことではないが、仮にも一国の王女であり自分の王妃である。波風は立てる必要は無い。

「陛下、お見舞はなさらないのですか？」
　随分と年上の宰相が穏やかな顔で探りを入れてくる。この宰相にかかっては、自分などいつまで経っても頼りない若造のままだろうと思いながら、聞かれたことには答える。
「……花は贈っている」
　それで充分だろうと言外に匂わし、昼食を取るべく執務室を離れる。壮麗な廊下を歩き、階段に目をやる。真新しい絨毯が一分の隙もなく敷きつめられていた。
　あの時、階段に絨毯さえ敷いてあればその場でこけるくらいで済んでいたかもしれない。いや、あんな踵の高い靴を履いていたのなら結局は同じことだっただろうか。
　絨毯の赤の残像がちらつき、ランドルフの中にさざなみをたてる。

　午後の用件は比較的早く済んでランドルフは城へと戻った。夕食までは特別用事もない。空き時間をどうしようと少しばかり悩んだ後で、ふと思い立って王妃の部屋へと赴いた。扉を警護する近衛、控えの間に待機する侍医、壁際に控える侍女たちの前を過ぎて寝室へと立ち入る。
　部屋は薄暗かった。側付きの侍女、エルマがランドルフの訪れに立ち上がって礼をとり、場を譲る。
　クリスティーナは眠っていた。微熱が続いているとの報告どおりに、陶器のような白い頬に薄紅がさしていた。薄い色の金髪はゆるく編んで顔の左側に流してある。
　ランドルフは眠るクリスティーナの様子をじっと眺めた。
　この生き人形のような王妃が自分の元に来た日を思い出しながら。
歴史はあっても小さな北国は当初完全に支配下に置く予定であった。

思いがけず鉱物資源が豊富なことが判明し、その流通加工と原料の供給という相互利益が考慮され同盟に変更された。
その証として、ランドルフとクリスティーナの婚姻がなされたのだ。
どこもかしこも色素の薄いクリスティーナは、淡い色目のドレスに身を包み自国へとやってきた。その硝子のような瞳には何の感情もなく、儀礼的にさしだした手に重ねられた指先さえひどく冷たかった。
人形のような――当初はほめ言葉だったはずの形容は、次第に冷たい印象からむしろ欠点の代名詞に変わっていった。
ランドルフとて政略で迎えたからとはいえ、冷淡に扱うつもりはなかった。華奢な姿態は本当に硝子細工のようで、力を入れれば壊れそうな気がして接し方に戸惑ったのを覚えている。
ただ何をしても、何を話しかけても礼儀は申し分ないが生き生きとした反応がない。贈り物に感謝の言葉は述べるが実感がこもっていないように感じられる。大して嬉しそうでないので、次第に贈る気も失せていく。
話をすれば知識も教養もあるのだが、会話を弾ませようとする意図がない。
少しずつ失望と諦めが大きくなり、なかなか子供にも恵まれなかったので側妃を迎えた。それすらも冷ややかに受け流された。
おのおの寝室の他に共用の寝室があるが、クリスティーナがそこに来るのは子供ができやすいとされる数日のみ。義務でいられても食指がうごくはずもなく、互いに背を向けて広い寝台の端と端で休む始末だ。
つい側妃に温もりと慰めを求めてしまっていた。
側妃の部屋から深夜赴いて、側妃の香水の香りをまとわせたまま寝台にすべりこんでも嫉妬するでもなく、硝子玉のような瞳がゆら

ぐこともない。
義務感から寝室を共にしてようやくの懐妊であったのに最悪の形でぶち壊された。

「……う……」

思いがけずクリスティーナが苦しそうな声を上げた。眉がひそめられかぶりをふるように顔が横向けられる。上掛けを握り締めている姿はひどく人間くさい。
珍しいこともあるものだとランドルフは興味をそそられた。
やがて閉じていた目蓋が開き、青い瞳がのぞく。いつになく瞳が潤んでいるように思えた。

「どうした、辛いのか?」

ぼんやりと視線をさまよわせてランドルフを認める。徐々に焦点があってきてクリスティーナはいいえ、と否定した。

「陛下こそどうなされました?」
「見舞いに来たつもりなのだが」
「……それは、わざわざありがとうございます」

弱っている時でさえ隙を見せない。目覚めればもういつもの、氷の王妃だ。
ランドルフは胸に宿った憐憫の情がすうっと消えていくのを感じた。そしてクリスティーナの発言が決定付けた。

「陛下。花を贈ってくださるのはありがたいのですが、今は」
「気に入らぬか」
「いいえ、とても綺麗です。ただ、今は花をあまり見たくないので

す」
「――私が贈ったからだろう。分かった、もう花は贈らぬ」
物をほしがらないクリスティーナも花だけは受け取っていたのだが、それすら迷惑かとランドルフは鼻白む。どこまでも相容れないのかと冷え冷えとした心地でランドルフはきびすをかえした。
食欲はとうに失せた。側妃の侯爵令嬢をその足で訪問する。
「まあ、陛下。いらっしゃるとは思いませんでした。私、感激です」
突然の訪問にも全身で歓迎の意を表す側妃のブレンダに、ささくれ立っていた神経が和らぐ思いがする。夕食をとっていたブレンダに付き合って軽くつまみ、酒を飲んで二人きりとなる。
ブレンダがランドルフの胸に顔をすりよせた。
「陛下、このたびのお子様のこと。さぞお辛かったでしょう。私も考えるだけで悲しくて……」
見るとほろほろと涙をこぼしてランドルフを見上げている。
その目尻に親指をはわせて涙を拭う。
「そなたは優しいな。そなたに子供ができていればよかったのに」
「ああ、陛下。もったいないお言葉です」
すがりついてきたブレンダを腕に抱いて、同じ女でこうも違うかと醒めた思いがぶり返す。今はただこの温かく柔らかい存在に溺れようと、抱きしめる力を強めた。
エルマは目覚めたクリスティーナの背中に枕をあてがって、消化

がよいようにと煮込んだスープの皿を手渡した。機械的に数口飲み込んで、クリスティーナは皿を下げさせた。

「陛下のご不興を買ってしまったわ」

美しい花の飾られた花瓶を見つめながらクリスティーナが囁く。エルマは唇を噛み締めた。クリスティーナが『今は』花を見たくない理由など決まっている。あの日、花を見に庭園に行こうとした自分を責めているのだ。

花は嫌でもあの日のことを思い起こさせる。血も凍るような一瞬と、その後の辛い現実を。

「王妃様ももう少し詳しく理由をおっしゃればよろしいのに」

クリスティーナが王女の頃から側についていたエルマは、つい主従の垣根を越えて本音を漏らしてしまった。

口を清めて再び寝台に横たわったクリスティーナが、困ったように微笑んだ。

この国の人間はほとんど目にすることのない、王妃の微笑は物悲しかった。

「そうできたら良かったのに」

03　否定

　ようやくクリスティーナが寝台から離れられるようになった頃には、ランドルフからの見舞いは途絶えて久しかった。
　一時は腰を強打したせいで歩けるかとまで危惧されていたが、ゆっくりと起きたり座ったり寝室の中を歩くことで侍医の顔に安堵が広がる。
　クリスティーナはぼんやりと窓の外を眺めることが増えていた。ショールを羽織ったクリスティーナの瞳は、まばたきもせずに遠い街並みや山々を見つめていた。
「王妃様、食事を用意しましたのでお召し上がりください」
「ええ」

　もともとあまり食がすすむ性質ではなかったのが、寝込んでからはいっそう細くなっていた。エルマに強く促されて口にはするものの、そうでなければ何も食べないのではと思うほどだった。

「もう食べられないの。ごめんなさい、下げて」

　申し訳程度に数口つついて、クリスティーナは給仕の侍女に告げた。侍女はためらいがちに皿を下げる。せめてと香りのよいお茶を淹れて、下がっていった。
　少しずつ熱いお茶を飲んで、クリスティーナは寝込んでいた間にきた見舞いの把握と、礼状を書くために王妃付きの補佐官を呼んだ。直々に礼状を書く必要のあるもの、祐筆に代筆させて署名だけをするものなどに分けられたものを処理していく。
「王妃様、あまり根をおつめになると、お体に障ります」

補佐官が進言した頃には、一通りの署名が終わっていた。
クリスティーナはペンを置いて補佐官に頷いて、執務用の机から離れた。
「王妃様、このたびのことは、あの……お気の毒でした」
まだ年若い補佐官が言葉を選んで慰めてくれる。クリスティーナは、その顔をまじまじと眺めた。
「ありがとう。教えてくれないかしら、今度のことはどういう風に言われているの？」
「あの、王妃様が踵の高い靴をお履きになっていて、階段から……と」
「そう、もういいわ。明日以降の公務も徐々に慣らしていくのでよろしくね」
補佐官が出て行ったのを確認してクリスティーナはふうと息を吐いた。
まだ本調子ではないので、体が重い。それ以上に噂のことで頭が痛い。
誰が発端か、どこから経由で広まったのか今から確認できるだろうか。国王のランドルフですらそのように報告を受けて、証拠の靴を寝台に放り投げたのだからこれを覆すのは難しいだろう。
今はまだ『事故』でもいつなんどき、これが『王妃が故意にやった』と歪曲されるか分からない。そうなれば、問題はこの城の中だけではなく故国との関係にも影響を及ぼしてしまう。
婚姻名目で同盟を結んで鉱物資源の加工技術を持った人材が技術供与を始めて数年、ようやく故国でも一定の基準の加工が可能にな

っている。
関係を今断ち切るのは得策ではない。
ただ、自分は今まででさえはお飾りの王妃だったのが、今回のことで完全なる役立たずになってしまった。子供を望めない王妃なんて。
噂が歪曲されれば、誰が誰に話したかを丹念にたどれば発信源の特定は可能だろう。それが自分を追い落とす意思を持つ人物ということになる。
私的な居室に戻り、鏡に映る自分を客観的に眺めてみる。冷たい印象しかかもし出さない、本当に人形のようだと自分でも思う。
「お母様に似ているって本当なのかしら」
そっと手を伸ばせば鏡の向こうからも手が伸びてくる。指先の触れた鏡はひどく冷たい。本当に氷でできているようだ。笑おうとしても顔が強張っていた。

「王妃様、お茶会にお招きいただいてありがとうございます。お加減はもうよろしいのですか？」
「ありがとうございます、ブレンダ様。せっかくお見舞いをいただいたのにお礼が遅くなってしまいました」
王妃の部屋で側妃のブレンダを招いてお茶会が開かれていた。王妃の向かいに座るブレンダは魅力的だ。濃い金髪は目に眩しく、碧の瞳は輝いている。頬は薔薇色で唇も紅い。
氷の王妃とは対照的に春の化身のような侯爵令嬢だった。身につけている暖色系のドレスもよく似合っている。
クリスティーナは冷静にブレンダを観察する。今回の件で城内の

勢力はブレンダ側に傾く。ランドルフが通っていることも承知している。遠からず、ブレンダが懐妊するだろう。
ブレンダは未来の国王の母で満足するだろうか。王妃としてランドルフの横にあることを望むだろうか。

「……とても綺麗な花をありがとうございました」
「いいえ、品物をと思ってても王妃様はなんでもお持ちですので」

にっこりと微笑んだブレンダに、控えた侍女達がひきつけられるのを感じる。ブレンダの部屋はたいへんに活気があるらしい。時めいている側妃であれば当然か。
自分付きの侍女も、本心ではブレンダ付きの方が良かったと思っていることだろう。自分に仕えていても張り合いはないだろうから。

「わたくしは何も持ってはおりませぬ」
「ご冗談ばっかり。ドレスも宝石も両手に余るほどお持ちではないですか」

そんなもの――。ほとんどが故国から持ってきたもの、それも婚姻が決まって初めて利用価値の出た自分に仕立てられたものだ。ランドルフからは、婚儀をあげてほどなくそんな贈りものも途絶えた。
本当に欲しいものはいつだって自分の手には入らない。
最初から手に入らなければ、存在を知らなければまだいい。手に入ると見せかけてすり抜けられる。何度もそんな経験を繰り返して、欲しいものなど欲しいと願う思いも失せていた。

「いいえ、わたくしには」
「王妃様は『王妃』ではないですか」
「あなたは『国母』の可能性を有しておいでではないですか」

お茶の香りはとてもよいのに、きな臭い。不快に思いクリスティーナは眉をひそめた。
ブレンダは王妃の地位を望んでいる。侯爵が後押しをするなら自分は命が危うい。今まで以上に口にするものに気をつけなければならない。
物騒なことを考えているクリスティーナをよそに、ブレンダは碧の瞳をきらめかせた。

「私、今回のことはお気の毒だと存じます。でも、あまりに不注意です。陛下のお子様を宿していながらあのような軽率なことをなさるなんて。
もし私が陛下のお子を身ごもったのなら、あらゆる危険から遠ざかりますのに」
「ブレンダ様、おっしゃる意味がよく分かりません」
「とぼけないで下さい。皆が言っています。王妃様が不用意に踵の高い靴を履いていたと」
「誰がそう言ったのです？」

冷たい声音に、ブレンダは言葉を飲み込んだ。薄青い瞳に貫かれてひどく決まり悪い思いになる。

「皆が、そう……」
「その皆とは誰なのです？　あの日、わたくしに衣装を着せた侍女は当日の靴も覚えていましてよ。かわいそうに、半狂乱になって靴のことを言っていましたから。
もちろんわたくしも踵の高い靴など履いた覚えはありません」
ランドルフが信じている以上何を言っても無駄なのは分かっている。ただ、この過失が一人歩きすれば故国が低く見られてしまう。それは王女として育った自分には容認はできない。

たとえ故国で疎まれていた王女だとしても、国の体面を汚すわけにはいかない。
ぱちりと音をさせて扇を閉じる。
「王妃様のお言葉とはいえ……」
「ええ、陛下に報告もいっていましたからどう取られても構いませんが、身に覚えのないことだけは明言しておきます」
一度、はっきりと疑惑は否定する。ランドルフにもそう言った。信じるかどうかは彼ら次第だ。でも否定した事実だけは残しておかないと、付け入る隙を与えてしまう。
「せっかくのお茶が冷めてしまいましたね。代わりを出しましょう」
人形のような冷たい表情のまま、壁際に固まっている侍女に目配せをする。慌ててお湯と代わりの茶葉を用意する侍女達。これだけの人物が目撃をしたのだから、噂としても広がるだろう。
ここまでがここでできること。後は当日のことを覚えている冷静な第三者を探し出すこと。エルマを通じて調べさせなければ。
「王妃様は……」
ランドルフの寵愛を受けて元々美しかったのがさらに匂うように花開いたブレンダは、さすがに言葉を濁した。冷たい？　血が通っている？　その辺りを言いたかったのだろう。淹れなおされたお茶を飲みながらクリスティーナは思考する。
面と向かって王妃の人格を攻撃するのはさすがに角が立つ。さっきの発言も取り様によっては充分に不敬なのだから。
「体調が完全に戻ったわけではありませんので、わたくしは公の場

に出る機会が減ります。どうぞ、陛下の支えになってくださいませ」
「王妃様。ええ、私にできることがあれば懸命につとめさせていただきます」
「わたくしも安心です」
きっと夜会などでランドルフの側にはべる姿を想像しているのだろう、ブレンダはさっと頬を赤らめた。なんて素直で一途な、可愛い娘なのだろう。
育ちのよさが繕わない表情に表れている。まだ自分に憎しみの目は向けられていない。自分を排除する意図は見て取れない。ただ無邪気にランドルフの全てを望んで、誰より近くにいられる王妃の地位を望んでいるのだ。
淑女の礼をとってブレンダを見送った後でクリスティーナは書簡をしたためた。
封蝋をほどこしてエルマに渡す。一通は国王のランドルフに宛てて、もう一通は北の故国に宛てて。
「ねえ、エルマ。笑ってみてくれない？」
「王妃様？」
おかしな要望にエルマが首をかしげながらも笑ってみせる。クリスティーナはエルマの笑顔に、目を細めた。
「ありがとう」
一人になって鏡の前でクリスティーナは確認するように呟く。
「此度の件、王妃の地位、国の資源と技術と流通路……わたくしの手札はどこまで通用するかしら」

空っぽは空っぽなりに働かないと。

ふとブレンダの素直さを思い出す。

「あなたの欲しがっているものは、とっくにあなたのものなのに」

あなたこそ、何でも持っているでしょう？　陛下の愛も、親の愛も。子供を持つ可能性も。

豊かな感情を表せる素直さも。

０４　始動

ランドルフはクリスティーナからの書簡を受け取った。薄紫の便箋は、花とクリスティーナの頭文字を刻んだ封蝋を施されている。
クリスティーナはよく書簡をよこす。儀礼的で内容も用件のみのことが多いが、それでも時候のあいさつやほんの短い私的な文句も添えられている。その筆跡は美しく、乱れもなくて本人同様の印象だ。
書簡の内容は、見舞いの礼と公務を休んだ詫び、そして……。

「今後は共用の寝室には赴かぬ、と」

義務で共にしていた寝室を今後は辞退するということか。侍医からの報告でひどく腰を打ったのは承知している。今後の懐妊は難しくなっただろうとも。その事情を踏まえてのこととは理解できるが、ひどく事務的にも思える。
これがブレンダだったら。ついそうして比較してしまうが、ブレンダであれば容易に想像がつくのだ。ひどく泣いて、すがりついて夜も一人でいるのを拒むだろう。人肌に触れていたがるに違いない。
もし今後子供が望めそうにないとなったら……身も世もないほどに悲しむだろう。

クリスティーナは寝台から離れるやすぐにたまった執務を処理しだしたとか。
あれは女の皮をかぶった男なのかもしれない。側近としてあれば、あれほど冷静で淡々と物事を処理していくのは頼もしいだろう。王妃としての公務ぶりも申し分がないのだから。
笑いも泣きもせずに、失った子供の事などすでにあれの中ではなかったことになっているのかもしれない。やはり王妃ではなく、側

妃として娶るべきだったかと今更ながらに思わされる。
「まあいい。これで側妃のもとに通っても文句はないだろうから」
寝室でも乱れた様を見せなかった氷の王妃よりも、包み込んでくれる側妃の方に情が移っても当然だろう。ましてや子供が難しいとなった現状では、本人の方から断ってくれたのはありがたい話ではないか。
そうは思いながら先手を打たれた感が拭えず、ランドルフは愉快ではなかった。

クリスティーナは自室で自分の手を見つめていた。空っぽの手は、しかし何でもつかめるのではないか。瞳に決意を宿して、クリスティーナは自分の衣装担当の侍女を呼んだ。
「王妃様、お呼びとうかがいましたが」
「もっと近くに。あなた、わたくしが階段から落ちた日に靴のことでわたくしをかばってくれたそうですね」
普段はエルマ以外の侍女を側によせたりあまつさえ踏み込んだ会話もしない王妃だけに、何を言われるのかとびくびくしていた侍女はがちがちに緊張していたが、その言葉にはっと顔を上げた。
「王妃様、私、悔しかったのです。王妃様が踵の高い靴だなんてとんでもない。
あの……ご懐妊が分かってから王妃様がどんなに着るものや履くものにお気を配られていたか知っていたものですから」
「ジェーン、だったわね。ありがとう、あなたがそんな風に見ていてくれたのを嬉しく思います」

ジェーン、と呼びかけられた侍女は目も口も丸くしてクリスティーナを見つめる。気高い女主人は、エルマとそれ以外の侍女に明確に線を引いていて名前を呼んだりすることはほとんどなかった。
着替えを手伝ったりするとありがとうとは言われていたが、さきほどのような真摯な響きではなく嬉しいなどと気持ちを表すこともなかった。
意外なことに頭は半分真っ白だが、ようやく言葉を口にする。

「もったいないお言葉です。王妃様」
「いいえ、当然のことです。あなたが嘘吐きにされてしまったのでしょう？　そのことで辛い目にはあっていませんか？」

ジェーンはぶんぶんと首を振る。王妃様が心配してくれた、その事実の前には陰口など取るに足らないことに思えた。
目の前の女主人は硝子のようなうす青い瞳でじっと見つめてくる。前にはそれが怖かった。何を考えているのか分からない、人間離れしている――そんな印象だったからだ。
それが今は小首をかしげて自分の反応を待っている。人形が魔法で急に人間になったような気さえした。

「いいえ、私は大丈夫です」
「それならよかった。呼んだのはそれも気になっていたのだけれど、もう少し動きやすい簡素な服を用意してほしいのです」
「簡素な、ですか」
「お忍びで出かけるような類のものが欲しいのです」

今までのドレスをできるだけ手直ししてほしいと頼まれて、エルマも立ち会ってドレスを選び出した。
王妃はあまりドレスに関心がないようで自分から作ることも少な

かった。側妃のブレンダに国王がドレスをかなり贈っている話をやはり衣装担当のブレンダ付きの侍女に聞かされて、悔しい思いもしていた。
着飾れば誰よりも美しくためいきを誘うのにもったいないと思ってもいた。
「体は一つなのに贅沢なものね」
「王妃様、体面というものがございます」
エルマにたしなめられながらもドレスを選ぶ王妃を、ジェーンは不思議な思いで見つめながら腕にドレスをかけていく。
一通り選んで縫製の部署に持っていくことになった。部屋を出ようとして礼をすればまた王妃から呼び止められた。
「ジェーン、あなたは衣装担当ならお針子などとも親しいのかしら」
「はい、補修などの関係もありますから」
「では腕の良いお針子には仕事があるかしら」
ジェーンもエルマも王妃の意図が飲み込めずに、ちらりと顔を見交わした。
「はい、町の手芸店でもそうですが腕の良いお針子は仕事に困りません」
「知りたかったのはそれでした。どうもありがとう。仕事ぶりは元から信頼していましたが、今回のことであなたが信用するに足る侍女だということがわかりました。これからもよろしく頼みます」
ジェーンはうっすらと涙を浮かべた。認められたのが嬉しく、心の底から王妃に仕えようとする忠誠心が沸き起こってきた。
王妃付きの侍女が側妃のところに行きたいと愚痴っていたがとん

でもない。
「わ、私これまで以上にお仕えします。なんでもおっしゃってください」
つかえながらそれだけを言うと、ドレスを両手にかかえて縫製部へと急いだ。
こんなに沢山王妃様と会話をしたのは初めてだ。今ほどあの人を綺麗にしたいという欲求にかられたことはない。細かく注文をつけて、このドレスを生まれ変わらせようと決意していた。

エルマは王妃を眺める。
「王妃様、ジェーンにお声をかけるなどこれまでありませんでしたね」
「あの娘はわたくしをかばってくれたのよ」
「自分に責が問われるのを恐れてのことかもしれません」
「それだったら途中でわたくしから命令されて、と主張を変えていたと思わない？　城内の者が、陛下ですら踵の高い靴を履いていたと信じているのに、あの娘は聞き取りの者の誘導にも最後までわたくしが高い靴を履いていなかったと言い通したそうだから」
小国から来た王妃と侮る者の多かった城内にあって、侍女も例外ではない。国内貴族の令嬢が務める侍女の目は侯爵令嬢のブレンダにいきがちだ。自分のことをブレンダに流しているのも承知している。
何より欲しかったのは信頼できる味方。数年かけて城内の人間を吟味し、ようやくまずはと思える人物を見出した。
そのきっかけが事故というのは皮肉だが。

「あなたの調査では掃除担当の者、営繕の者、中堅どころの侍従、そして仲介役の伯爵といったところね」
「そこまではたどれました。伯爵様と侯爵様の繋がりは……」
「貴族社会の繋がりでしょう。陛下に疎まれて侯爵の邪魔者となれば貴族階級を取り込むのは困難ね」

一人で納得してクリスティーナが頷く。

「エルマ、わたくしは決めました。次は宰相殿にお会いしなければ」

空っぽなら失うものはない。今の自分にあるのは王女であることと、王妃であること。
——自業自得で国王陛下に疎まれた王妃であること。小国の出自と侮られていること。

「ねえ、エルマ。ジェーンのように素直に泣けるのっていじらしいわね、慰めて守ってあげたくなるってこういう感じなのかしら」
「王妃様、男性のようなことをおっしゃいますな」
「もう女性である意味はないのだから、そう思うのかも」

素直に泣けて笑えるのなら。

——私の前で笑うな。妃が亡くなったのになぜお前が生きている。なぜのうのうと笑えるのだ。
——泣くな。気がめいる。誰かこれをよそに。私の前に連れてくるな。
——お前の姿など見たくない。

北の故国でもなお寒々しい針葉樹に囲まれた離宮で、心は芯まで

凍えた。
温かくなっても融けることのない氷の大地のように冷え切ってしまっている。
「さて、氷の王妃がらしくないことを始めようかしら」
王妃の執務室に呼びつけられた宰相は言われたことに目を瞬かせた。
「孤児院、ですか」
「ええ、定期的に通いたいんです。執務の調整をお願いします。それと城下に屋敷も。小さいもので構いませんので」
この王妃は何をするつもりなのだろうか。冷静沈着、老獪と評判の宰相にも王妃の考えが読めない。
王妃は慈善活動はこれまでもしていたが、主として寄付に関するものだ。
「難しいですか？」
問われて熟考する。要望そのものは難しいものではない。調整に少し手間取ったとしても実現はする。ただ次の発言にはその意図を図りかねた。
「お忍びで通いたいんです」
「王妃様がお忍び、ですか」
貴婦人の慈善活動はいかに注目を集めて情け深い人物かという評

判を取るために行う、一石二鳥の暇つぶしのようなものだ。それをお忍びでとはどういうつもりだろう。
宰相の困惑を感じたのだろう、王妃は説明を始めた。

「わたくし、もう子供が難しいでしょう？　ですから親のいない子供の親代わりのような真似事がしたいんです。この孤児院は以前に寄付した際に子供の直筆で礼状が届いたので興味がありまして」

それに、と言葉が続く。

「陛下はわたくしのすることにさして関心は示さないでしょうから」
だから好きにさせてください、とたたみかけられて宰相は承諾した。
王妃の慈善活動は褒められこそすれそしられるようなことではない。
ただ、子供が残念なことになっての行動に違和感も感じる。宰相は、この王妃は本心は語るまいと察した。ならば王妃の行動を注意深く見守ってその意図を探るだけだ。

「ただ、陛下へのご報告はさせていただきます」
「それは勿論」

大枠は固まり、細かい点は後日詰めるとして宰相との会見は和やかに終わった。さすがに有能な宰相だけあって、半月後にはこじんまりとした屋敷も手配して孤児院への訪問日も決めていた。
クリスティーナは手直ししたドレスに身をつつみ、目立たない髪形に結い上げて馬車に乗り込んだ。エルマとジェーンも同行し、王妃付きの近衛が一人は御者の横に座り、もう一人が馬で付き従う。

目にした孤児院はくたびれていた。あちこち補修が必要なようだし、子供の数に建物の大きさが見合っていない。
出迎えてくれたのは目尻の皺が優しい印象をかもし出す修道女で、院長だった。
応接室に通されてクリスティーナは院長と話をする。院長ははじめは驚いた様子でクリスティーナの話を聞いていたが、そのうちに目元を潤ませて何度か拭いそして手を胸元に持っていき、祈りの形をとった。

その後は院長の案内で院内を見て回る。明らかに定員以上の子供達がいて、一様に興味深げに見つめている。服装、居住環境、栄養状態。さすがに質素ながら掃除は行き届いてはいるがその他は問題が山積みのようだ。
冷静な目で見回していたクリスティーナは、刺すような視線を感じたが受け流した。馬車に足を向けようとしたクリスティーナは背後から呼びかけられた。
反抗的な目で見ているのは院でも年長の少年だ。体に合わないきつめの服を着ている。

「あんた王妃様だろう？　なにしに来たんだ？　ちょっと寄付して慈善家ぶるのか」
「ボブ、おだまりなさい。王妃様に失礼ですよ」

院長が慌てて止めに入るのをクリスティーナは制した。つい、とボブと呼ばれた少年に向き直る。
横と背後にいる近衛がす、と気配を変えるのも感じた。

「ここに手を入れようと思って来たの」
「そう言ってみんな少しの間だけは寄付したり、訪問してきたりするんだ。でもそのうち飽きてほったらかしだ。俺達はお貴族様の気

まぐれに振り回されるのはごめんなんだ」
「まあ、勇ましいこと。でも振り回されるのは力がないからでしょう？」
不敬ととがめようとした近衛を目だけで黙らせてクリスティーナは少年に答えた。
ここで皮肉に笑えたならもっと効果的に少年の怒りを買えただろうに。
「あんたも気まぐれなんだろう。中途半端に手を出すくらいなら最初から手を差し伸べるな」
——温もりを知った後で飽きたおもちゃのように放り出されたら、余計に惨めになるから。
クリスティーナはボブの言いたいことを察した。
これは拾い物かもしれない。
「勿論、気まぐれよ」
言い切ったクリスティーナにボブを含めて二の句が継げないようだ。
「わたくしの気まぐれがどの程度か実感するといいわ」
近衛と御者に指示して馬車の後ろに付けていた箱を持ってこさせる。中には本とお菓子、様々な大きさの服と靴が入っていた。
呆気に取られている少年の耳を涼やかな声がうった。
「これはほんのあいさつ代わり。明日には全員分の服と靴をよこすわ。院長様、あとはこれを」

院長に皮の袋を渡す。

「当座の費用です。たまった支払いに当ててください。後ほどわたくしの代理人が参りますので、先程の件を相談なさってください。それからボブ、だったかしら。あなた、力が欲しいのでしょう？わたくしもなの。だから吼えていないでしばらく静観なさい」

それだけ言ってクリスティーナは馬車に乗り込んだ。

走り出した馬車で侍女二人がもの問いたげな顔をしている。後で、とだけ呟いてクリスティーナは外を眺めた。宰相が用意してくれたという屋敷を目指して馬車は走る。

最初の一歩を踏み出したと、氷の王妃はそう思った。

05　抱擁

——王妃様がおかしなことを始められたらしい。

噂ははじめは密やかに語られ始めた。

孤児院を訪問したクリスティーナ達は、宰相が用意した城下の屋敷に落ち着いた。使用人も少ないその屋敷は、芝生と灌木の庭を有していた。庭を眺めたクリスティーナは宰相の配慮を感じる。

ジェーンがお茶を淹れ、エルマと三人でテーブルについた。渋るジェーンだったが、クリスティーナがお座りなさいと言っただけで観念してテーブルを囲む。

お茶を飲んでクリスティーナはふう、と息を吐いた。

「王妃様、お考えを私どもにお教え願えませんか？」

エルマの質問に、ジェーンも内心で同意してクリスティーナの表情を伺う。そこにあるのは氷の王妃に相応しい、いつもと変わらない無表情だった。

テーブルの上にほっそりとした手をのせて、クリスティーナは指を組み合わせた。

「慈善事業に興味があったのは本当。今回のことで、わたくしの城内の居場所は縮小することが目に見えているでしょう？　貴族の方々は……ジェーン、ごめんなさいね。陛下と侯爵になびくでしょう。だから城外でわたくしにできることがないか模索したの」

淡々と現状と今後を指摘するクリスティーナにエルマもジェーン

も黙り込んだ。
　側妃に子供ができればその勢いはますます盛んになる。王妃は有名無実の、本当のお飾りになる。最悪王妃を廃そうとする動きが起こるかもしれない。
　一国の王女を迎えたのだから実現は難しいかもしれないが、国同士の勢力は不均衡なのでごり押しが通らないとも限らない。
　ただそれが孤児院の援助とどう繋がるというのだろうか。
　ジェーンは首をひねるが、エルマはクリスティーナの意図に気付いたようだ。
「王妃様。まわりくどうございます」
「わたくしにとっても未知のことなのだから、時間をかけてじっくりやっていきたいの」
　そう言って、クリスティーナは庭の緑を眺めた。
「それはそうと王妃様、なぜこのような屋敷を用意させたのですか？」
「ここに人を置いて孤児院との連絡所のように使いたいと思ったのが一つ。もう一つは孤児院で病気をもらうかもしれないでしょう？すぐに城に戻るとわたくしたちが病気を持ち込んでしまうかもしれない。だからここはいわば隔離の場のようなものでもあるの」
　公務があるからそんなに長くいられるわけではないけれど、と断ってここでできる執務をするのだと言う。
「あとね、手芸でもしようと思って」
　ここで刺繍やらレース編みをしたいのだと。時間が潰せるし作品は孤児院で売らせて収益にあてたいと。

「ゆくゆくは孤児院の子供達にも作らせたいの。針の技術も教えて、男の子は職人に弟子入りさせて金属加工でも覚えてもらいたいわ」
「それでお針子には職……ですか」
「教育と技術があれば生きていきやすいでしょう。わたくしはわたくしの考えがどこまで通用するか試してみたいの」

だからすでにある孤児院に手を貸す形で、事業をしてみたい。
ゆくゆくは育った人材を使ってみたい。城外に出るときのことを想定して。
クリスティーナは自業自得の孤立と自分の立場を評価している。このまま城に居続けるには多大な努力を要し、危険と隣り合わせになる。『事故』はいたるところで起きても不思議ではないのだから。
慈悲で離宮にこもることを赦されればいい。最悪は命を狙われることになる。あるいはこちらに汚名をきせて放り出されるか。
帰る場所はとうにない。ならば。

「わたくしの気まぐれにつきあってもらえると都合が良いのだけれど」

エルマは小さく溜息をつき、ジェーンはしっかりと頷いた。
気まぐれというには大掛かりで長い時間も必要なのだが、クリスティーナが自分で望んだ珍しいことでもある。

「それならさっそく始めましょうか」

三人で椅子に座って刺繍を始めた。糸や布も大量に運び込まれていてエルマはクリスティーナの用意周到さに内心驚きと呆れを覚えた。クリスティーナは慣れた手つきで緑と鳥を刺繍している。
王妃手ずからの刺繍……美談とともに売りつければ、高値で買う

れば養子や住み込みで雇おうかとする流れもおきるかもしれない。
貴族や商人は多いだろう。孤児院の知名度も上がる。興味が持たれ
　親のいない子供達を、子供を失った王妃が援助する。
　尊い行為のはずなのに、エルマは寂しさを抑えられなかった。

　週に一度か十日に一度程度、王妃は城をあけて翌日か翌々日に戻る。三ヶ月も過ぎようかとしていた頃には、その行動は様々な憶測を呼び格好のお茶会の話題にもなっていた。

「地味な格好をなさって城を出られるのですって」
「ブレンダ様が時めいていらっしゃるので、居辛いのではなくて？」
「元々が北の、言うなれば田舎のご出身ですし、城外の方がお気が楽なのかもしれませんね」

　まあ、と貴族の夫人や令嬢たちが笑いさざめく。

「王妃様は孤児院に足をお運びだそうよ」

　情報通と名高い伯爵夫人の言葉に、あらと失望ともとれる声があがる。慈善事業であれば──つまらないこと。
　もっと面白い秘密だと思ったのにといった空気が広がる。

「ブレンダ様、王妃様はあなた様に遠慮なさっているのかもしれません。この機会に陛下の関心を独り占めになさってくださいな」
「まあ、皆様ったら。それは王妃様に失礼ではなくて？」

　ブレンダは目の色に合わせたドレスを着て、それに負けないほど輝く瞳を話を向けた夫人にあてる。国王に愛されている自信は、美しい侯爵令嬢をますます魅力的に見せていた。今を盛りに咲き誇る

大輪の花のようだ。
実家の侯爵家も財力や地位は申し分ない。元は有力な王妃候補だったこともあって、気品に満ちている。
「いいえ、王妃様が陛下のお子様を残念なことにしてしまった後ですもの」
ブレンダが世継ぎを産めば、このお茶会に参加している貴族達にもおこぼれはあるだろう。
人形のような他国出身の王妃では、取り入っても旨味は少ない。そう判断して割りに早い時期から王妃の周囲から有力貴族の取り巻きは消えた。
代わりに蜜に群がるかのように、側妃になったブレンダの周囲は華やかだ。
「こればかりは私だけでは無理な話ですもの。気長に待ちますわ」
ブレンダの輝く笑顔からはそんなに長く待つ必要もないだろう。お茶会の参加者の間で明るい未来を確信するような、そんな空気が広がった。

ランドルフは宰相からクリスティーナの行動の報告を受けていた。
「孤児院の修繕を済ませ、近隣の土地と建物を買い上げて年長の者の宿舎と工房を作らせました。教師も手配して読み書きや計算を教えているようです」
「随分と入れ込んでいるようだな」
「年長の少年少女を宿舎から職人のところに通わせているようです。住み込みですと扱いが過酷な場合がありますので、通いにさせてい

ると聞き及びました」

こざっぱりした服を着て、意欲に燃えた年長の少年少女が職人の下で技術を学んでいるそうだ。
相場よりも安い賃金で構わないから雇って教えてくれと王妃からの書簡もつけていたらしく、職人にも孤児院側にも益がある。
「王妃は何をしているのだ」
「子供達の相手をしたり、一緒に遊んだりしているそうです」
「あれが、子供と遊ぶだと？」
ランドルフはにわかには信じられない。人形のような氷の王妃が子供達と遊ぶ？　何かの冗談だろうか。

「私をかつぐつもりか？」
「いいえ、事実です」
「……王妃が次に孤児院を訪れるのはいつだ？」

装飾を抑えた地味な馬車で乗り付ければ、子供達の元気の良い声が聞こえる。
目立たないように周囲に配された護衛は宰相の指示だろう。直近の近衛は二人と聞いているが、要所に軽く十人以上が目を光らせている。
国王と認めて緊張の色を濃くする彼らに軽く頷いて、ランドルフは孤児院の門をくぐった。孤児院の庭は買い入れた土地を続きの庭にしたようで、まだ土の所が半分、緑の所が半分といったところだ。
寒い中で子供達は元気に散らばっている。だが、どの子も一様に声を殺し、気配を消そうとしていた。
何をしているのだろうと恐縮している院長の後から庭に回る。
そこには目隠しをして、子供達を探そうとする王妃の姿があった。

「いいわよ。静かに逃げて」

そう言いながら、腕を前に伸ばして歩き始める。子供達はわざと王妃に近づき、気配に気付いた王妃がそちらを向くと手が届かないように逃げたり、しゃがんだり。それを見て他の子供達が口に手を当てて笑いをこらえている。

遠くで王妃様こっちと声をかけて王妃が近づくと、忍び足でよそに逃げる。

ランドルフはこの光景を黙って見入る。初めて見る王妃の姿だ。素材と仕立てはいいのに地味に作ってあるドレスを着て、歩きやすそうな靴を履き、髪の毛も上の方で軽く結んで下半分は背中に流している。

音だけを頼りに子供達をつかまえようと戯れている。

——私の見ているものは何だ？　本当に王妃なのか？　ランドルフは自分の目で確認しながらもまだ半信半疑だった。

そのうちに何かの加減でか王妃がこちらに歩を進める。子供達のように避けようかと思った。孤児院で子供達と遊ぶという王妃の姿を確認できたのだから、目的はもう果たした。このままこっそりと馬車に戻ればいい。それでいいはずなのに。

付き従う近衛達が何とも言えない表情で自分を見ていることにも気づいているが、ランドルフはあえてその場を動こうとはしなかった。

クリスティーナの伸ばした手が自分の服に触れた、と思った次の瞬間。

「つかまえた」

初めて聞く興奮を含んだ声と共に胸の周りに腕を回された。抱きつかれたランドルフは驚きで声も出せずに、クリスティーナを見下ろす。

「誰かしら、男の子ね。ジョージ？　それともニール？　こんなに大きな子がいたかしら。近衛の人にはちゃんとよけるように言ってあるのだけれど」

クリスティーナが少し身を引いて離れようとした。自分でも何をしているか自覚せずに、ランドルフはクリスティーナの腰に腕をまわしていた。

片腕でクリスティーナを抱き、頭の後ろで結ばれた目隠しの結び目に手を伸ばした。

「誰です、わたくしを離しなさい」

固い声で離れようとするのを赦さずに、ランドルフは布を取り去った。待ちかねたように見上げた、薄青い瞳が驚きで揺らめいている。

昼の光の中で、これほど間近で見つめ合ったことはなかった。

「陛下、どうしてこんな所にいらっしゃるのですか」

かすれたような声がなぜか人間くさく聞こえて、ランドルフはこれは本当に氷の王妃だろうかと腕の中の存在を疑問に思うのを禁じえなかった。

06　会話

「失礼いたしました」

庭を子供達を探して歩いていたせいか、クリスティーナの頬はうっすらと紅潮していた。下ろした髪の毛とあいまって少女めいて見える。

ただ口調はもういつものものに戻っていた。ランドルフの腕から抜け出て立つ姿は氷の王妃のものだった。

「孤児院に足を運んでいると聞いたので、様子を見に来たのだ」

わらわらと子供達が集まってきた。好奇心いっぱいにランドルフを見上げている。

「おうひさま、この人だあれ？」

クリスティーナのドレスの裾を握った子供が聞いてくる。クリスティーナはかがんで、その子と目線を合わせた。自然に頭をなでている。

「この方はね、……明かしても？」

最後の言葉はランドルフに向けられた。かまわないと頷くと、クリスティーナは子供にゆっくりとした口調で教える。

「この方はね、国王様よ」

「こくおうさま？　一番えらいひと？」

「そう、一番偉い方」

国王様と聞いて一斉に子供達の目が輝く。ランドルフは至近距離でこんなに多くの子供達に囲まれることも、好奇心丸出しに見つめられることもあまりないので内心たじろぐ。クリスティーナは立ち上がり、子供達を見回した。

「おやつの時間よ。手を洗って院長先生からもらいなさい」

わあっと声を上げて子供達が院内へと駆けていく。クリスティーナはその後姿を目で追う。見守るような穏やかな表情に、しかしランドルフは穏やかではなかった。

颪で乱れた髪の毛を払いながら『王妃』がランドルフに向き直る。

「わたくしも院内で手伝うことになっております。陛下はお戻りに？」

「……いや。私も付き合おう」

クリスティーナはランドルフを案内して院内に戻る。壁は明るい色の壁紙が張られ掃除も行き届いているようだ。最近増築されたような明るい食堂に、子供達がそろっていた。

クリスティーナはドレスの上からエプロンをかけて髪の毛をまとめて手を洗うと、小さい子供がおやつを食べる介助を始めた。

食堂内では侍女のエルマともう一人も同じように介助をしたり、こぼれたものの始末をしていたりと賑やかだ。

ランドルフは壁の前で王妃の様子を眺める。

服をよごさないようにと布をつけた子供に話しかけて、口元にスプーンをもっていく。口に入れると調子をあわせて傾けたスプーンを引き抜く。

「おいしい？　そう、よかった」

こんな優しい、甘い声も出せるのかと初めて知った。もっととねだられて、またスプーンでおやつをすくっては食べさせている。口元についたものをふき取ったりもしている。まるで——母親のように。

自分達の子供は失われてしまったのに。

ランドルフはこぶしを握り締めた。城では着替えから人の手を借りるような王妃が、ままごとのように他人を世話している。一体、どんな目的からだろうか。

これは氷の王妃なのだと自分に言い聞かせるように、ランドルフはクリスティーナへ探るような眼差しを注ぐ。気位の高い、よそよそしい、情のない王妃のはずなのだと頭の中で何度もくりかえす。

おやつが終わればまた庭で遊ぶ者、中で遊ぶ者と思い思いに散らばっていく。寝てしまった子供を王妃の近衛が抱き上げて、子供達の寝室へと運んでいく。

後は食器を片付けテーブルを拭いて、食堂は落ち着いた空間に戻った。

大人たちがテーブルについてお茶となる。ランドルフも行きがかり上、自分の近衛とともに風変わりなお茶会に参加することになった。

かざりけのない茶器に、悪くはないが最高級ではない茶葉。王妃はそれに不満な様子もなく静かにカップを口に運んでいる。

「子供が大勢ですと賑やかでしょう？」

「そうだな」

実に久しぶりの国王と王妃の会話だった。侍女も近衛も細心の注意を払ってこのやりとりに聞き入っているようだ。王妃は無表情ではあるがくつろいだ様子を見せている。対する国王も場に臆するこ

とはない。
しばらく無言でお茶を飲み、カップをソーサーに置いた王妃が国王に問う。
「この後は夕食の支度です。陛下はどうなさいますか？」
エルマが王妃の茶器を下げるのを横目で見ながらランドルフは少しの間思案する。
気まぐれでねじ込んだ孤児院訪問。帰城しないと侍従長や宰相がうるさいだろう。だが、好奇心が勝ってしまった。
「終わるまでここにいる」
「ではごゆっくり」
優雅に一礼してクリスティーナは食堂の続きの厨房へと姿を消した。
ランドルフはもう一杯茶を注いでもらいながら、少なからず自分が混乱しているのを感じる。
孤児院にいる王妃が、城での王妃と違っているからだ。表情に乏しいのは変わりなく自分への態度もいつもと同じだが、子供達や孤児院の大人達、侍女や近衛に向けるまなざしや口調がどこか柔らかみを帯びていて眼差しも優しいような気がする。
自分だけが締め出されているような疎外感をランドルフは感じた。
王妃を抱き寄せてしまった手を見つめる。王妃から抱きつかれるのも初めてなら、公務以外で触れ合うのもいつだったか思い出せないほどだ。
違和感を感じたのはブレンダに馴染んだせいだろうか。そもそも抱きしめることなど絶えて久しかったからだろうか。
玄関の方から人の声がしたと思ったら、遊んでいた子供達よりも

年長の少年が入ってきた。多くの近衛と、悠然とした態度で座っているランドルフに少し臆しているようだ。
院長が最年長の少年だと説明した。

「名は？」
「ボブといいます」

聞けば鍛冶の工房に通っていると言う。待遇は悪くない、工房の職人は厳しいがよく教えてくれている、早く技術を学んで独り立ちしたいと将来の夢を語った。
今は帰ってくると年下の子供達の世話をして、決まった曜日に教師から教えてもらっていると毎日の生活も説明した。

「王妃様のおかげです」

きっぱりと言い切った少年の目は澄んでいた。よほど王妃に信頼を寄せているらしい。
ランドルフは少年に、疑問に思っていたことを尋ねた。

「王妃はどうしてこんなことを始めたか、知っているか？」
「王妃様は気まぐれだと言っていました。あと、力が欲しいからって」
「力？」

ランドルフは聞き返したがボブという名の少年は間違いないと頷いた。このような場所でどんな力が得られると言うのか。
第一、王妃は既に権力を持っている。公には自分の次のだ。
ランドルフは首をかしげざるを得なかった。
思い立って厨房の様子をうかがうと、王妃が孤児院の修道女や年長の少女と一緒に野菜を切っていた。意外にも器用に刃物を扱って

いる。大きな鍋に材料を入れたり、肉を漬け汁に浸したりしている。

傍らの少女に話しかけられた時、一瞬王妃が笑ったように見えた。瞠目した次にはいつもの表情だったので見間違いと判断した。しかしやっていることは王妃としてはあるまじき労働であり家事だ。

──これで何の力を得るのだ？

元々何を考えているか分からない王妃だが、いよいよ思考回路が謎だ。

ランドルフはまた食堂に戻り、手を顎にやって思索した。

食事もできあがってクリスティーナ達は孤児院を後にした。いつものように馬車に乗り込もうとしたクリスティーナに、国王の侍従が主の言葉を伝えた。クリスティーナと馬車の扉を開けた侍従との間でやり取りがなされた。

クリスティーナはしばし考え込んで、後ろに控えた侍女達と近衛に言葉少なに指示をした。そして一人だけ国王の侍従が控える馬車に乗り込んだ。

外見は地味だが内部は贅を凝らした中に、ランドルフがゆったりと座りクリスティーナを見ていた。クリスティーナが座席におちつくと、馬車が走り出す。

しばらくの間、二人とも何も言わなかった。

「随分とあの孤児院に肩入れしているな。罪滅ぼしのつもりなのだろうか」

「罪滅ぼし──そうかもしれません」

ランドルフの直接的な問いに、やや遅れてクリスティーナが返す。目線はランドルフの胸の高さだ。

抑揚のない冷静な声音は、かえってそらぞらしく聞こえてしまう。

手を重ねて膝の上に置き端然と座っている姿は王妃そのものの品格で、先程の孤児院での様子が嘘のように思える。
「そなたは、あそこでどんな力を欲しているのだ？」
クリスティーナがランドルフをゆっくりと見つめた。ふいに庭で見つめ合った時のことが思い出されランドルフの鼓動が高鳴る。
「誰からそれを」
「ボブとかいう少年だ」
「ボブが。そうですか」
ボブと聞いてクリスティーナの表情がほんの少し緩んだ。親しい者を思い浮かべるような顔になる。
王妃が孤児院で結んだ絆が察せられて、また奇妙な疎外感を感じる。もう何年も親しい間柄ではなかったのに王妃が城の外に目を向けるようになった途端に、なぜ興味をそそられてしまうのだろうか。
「人として生きる力、でしょうか」
「なんだ、それは」
「わたくしは、孤児院の子供達と一緒に育てなおしをされているのです」
成人し、婚儀もあげて子供までできた王妃が育てなおしなどとおかしなことを言うので、ランドルフは面食らった。
ランドルフが戸惑っている様子に、クリスティーナは内心でいかに今まで表面的な関係であったかと思う。踏み込んだ会話をしたことがないのでどういえばランドルフに伝わるかと悩む。
「最初はわたくしでも人の役に立つことができればと始めたのです

が、いつからか子供達から素直な感情や懸命に生きようとする強い心を教えられています。――わたくしは人と接するのに向いていないと自覚しておりますので」

言葉を選びながら、気持ちを口にするのがこんなに難しいとはと思う。人と距離をとり寄せ付けず、傷つけないように傷つけられないように振舞ってきたつけは大きい。

王族の誇りで表面を糊塗してきたように思うがそれも限界のようで、がらんどうの自分に嫌気がさしてはじめたことだ。

役目があるうちはよい。重要な、ほとんどそれだけを目的として生かされてきた自分がその役目を果たせなくなった時、この先をどうしていいか分からなくなってしまった。

お飾りの王妃で生き続けるべきか、生きられるのか。あるいは。

「……そなたの考えていることは分からぬ」

「分かろうとしてくださっただけ、ありがたく存じます」

軽く頭を下げる王妃に、ランドルフはやはり変わったと思う。今までの王妃であれば『申し訳ございません』で済ませていただろう。完璧な謝罪はそれ以上踏み込むことを冷ややかに拒む。王妃はこちらの行動や考えに理解や共感の念を表すことは、ほとんどなかった。

それがほんのわずかにせよ表情が変わるようになり、自己完結してしまっているようだが表面的でない考えを口にする。

初めて素の王妃を見出した気がした。

「それにしても、そなたから抱き付かれるとは思わなかった」

「あれは……偶然です」

「そうか、偶然か」

戯れ半分でランドルフは向かいに座るクリスティーナの腕を引いた。座席から腰が浮いたのを強引に引き寄せる。
抱きしめて食堂で感じた違和感の正体に気付く。元々華奢だったのが記憶にあるのよりも一層。

「――やせたな」

ランドルフの予想外の行動に硬直していたクリスティーナが、ぴくりと肩を震わせた。力をこめれば本当に壊れてしまいそうだ。
やせてしまうくらいなら何故、とランドルフに諦めきれない思いがおこる。

「何故、踵の高い靴など履いたのだ」
「わたくしは、履いてはおりません。そのことは前にも申し上げたはずです」

王妃の声が硬質な響きを持ち、ひどく冷ややかに言い放たれる。ぐいと胸を押されてランドルフは腕の力を緩めた。後ずさって座席に座りなおした王妃の顔に、表情はなかった。
先程までの穏やかな雰囲気は霧散してしまっている。目の前にいるのはまさしく氷の王妃だ。

「このような戯れはおやめください。ブレンダ様にしてさしあげればよろしいでしょう」
「そなたは私に触れられるのも嫌なのか？」
「わたくしに関わるのは時間の無駄だと申し上げたく。陛下に必要なのは一日も早いお世継ぎの誕生です」
王妃の内面がのぞけたかと思えたのに、すぐに氷壁が築かれてしまう。

共用の寝室には赴かぬ。書簡でもそう記されていたではないか。
ランドルフは奥歯をぐっと噛み締めた。

国王が王妃を伴って帰城したことはすぐに噂になった。
ブレンダは渡ってきた国王に身をよせる。国王も優しく抱きしめかえすが、ブレンダは背中に回した手で国王の服をきつく握り締める。
けして渡さない。そんな意思が込められた力の入れようだった。

クリスティーナは屋敷に寄らずに戻ってきたことを気にしたが、国王陛下自らが孤児院にいてそのまま帰城したのだから病気云々は言っても仕方がない。
それよりも、と溜息をつく。自分の体に腕を回して抱きしめられた余韻をなぞる。

「子供達から素直な感情を学んでいると言いながら、わたくしのひねくれた態度はどうなの。救いようがないわ」
まずい対応と振り返り、反省の口調は苦かった。

07　波紋

基本的に顔を合わせないで済ませることは容易い。私的な交流が耐えて久しかったならなおさらだ。
ランドルフは王妃と孤児院から戻ってから、あえて王妃のことを考えることをやめた。――やめたつもりだった。
執務を行い、気が向けば側妃のところに渡る。
ただ執務の合間であるとか、側妃の前でも王妃の話題を自ら出すことはなく、ただ傍目からはほんの少しだけ心ここに在らずのように思えた。
宰相と側妃はそれを敏感に察する。

「明後日の式典の手順はこのようになっております。今回、王妃様と民に手を振る場面がございますので」
「その前の箇所が変更だというわけか」
式典の概要を記した書類を手に、ランドルフは頷いた。
王妃と手を振る。専用に造ってあるバルコニーの上から、その区画だけ特別に開放して集まった民に手を振る。国王と王妃の存在を内外に示しながら、民の様子を間近に見られる機会だ。
昨年も、その前の年も王妃はよくできた人形のように手を振るだけだった。ランドルフと目を合わせるでもなく、ましてや微笑むことなどない。
民も笑わない王妃ということはよく知っていて、それでも普段ほとんど見ることのない王族を自分の目で見られる数少ない機会と、庭に押し寄せて歓声をあげる。『国王様万歳』の声が『王妃様万歳』よりも圧倒的に多いのが常だった。

手か、とランドルフは己の手を眺める。

孤児院で王妃を抱きしめ、馬車の中で拒絶された手。
触れられるのも嫌なのだと拒絶された手。ぐっとこぶしを握り締めてランドルフはくっと奥歯を噛み締める。考えまいとするのに、気付くと孤児院での王妃のことを思い出している。
そんな自分にいささか嫌気もさしていた。

「そなたは王妃の孤児院訪問をどう思う？」
「たいへんご立派だと思います。公務に穴をあけることなくこなされているようですし」

あれからも定期的に王妃は孤児院に通っている。城下の屋敷に滞在しては城に戻っていた。屋敷のことを調べさせても不審なことはない。
誰かが訪問することもなく、接触するでもなくひっそりと過ごして城に戻ってくる。本当に単なる慈善活動らしいと、貴族や城の使用人の関心も波が引くように沈静化していた。
ただ、ランドルフだけが気にしている。認めまいとしてはいてもだ。

「あそこでの王妃は、人が違っているように思えた」
「左様でございますか」

子供達と戯れて、間違いながらも抱きついてきた。あの時の腕の力と華奢な感触、興奮を内に秘めた声と側妃のとは異なるさわやかでいてどこか甘やかな香りが、何度側妃で上書きしようとも脳裏から消え去ってはくれない。
少し近づいたかと思えば、冷ややかに遠ざかる氷のような無表情もだ。

「――王妃は恐ろしく愛想はないが、あれは嘘をついたことがあっ

ただろうか？」
「王妃様がですか？　私の記憶にはないように思いますが」
「そうだな、私にもない。ところで王妃が階段から落ちた日の報告書は信頼できるものであろうな？」
抽象的な質問から具体的な事柄の質問になり、目をまたたかせていた宰相は表情を改めた。
「はい、そのはずですが」
「王妃が踵の高い靴を履いていたのも間違いないとしてよいのだな？」
自身そう報告を受けて、階段下で転がっていたとされる靴も『証拠』として提出されて実際に手に取っている。
王妃が目覚めたと聞き及んで寝室へと赴き、寝台に放り投げたのも確かだ。——だが。
「王妃様ご本人と、王妃様付きの侍女は一貫して否定をしております」
「侍女とやらの証言は報告書には？」
「記載はしてございます」
わが身可愛さでの証言であろうと結論付けられている、と言外に宰相はにおわせる。ランドルフもその可能性は充分にあるとは思っているが、馬車での王妃の口調は捨ておけない気がした。
「もう一度、秘密裏にそなた自らで調べてはもらえぬだろうか」
「承りました。陛下、ブレンダ様のほかに新たな側妃を迎える話はいかがいたしましょうか？」

王妃が懐妊してからその性別を含めて子供の誕生まで静観する構えだったのが、失われてしまった。以後の懐妊も期待できそうにない。

今現在、ランドルフの子供を産める女性は側妃のブレンダただ一人。それでは心もとないと、にわかに側妃をとの声が上がっている。もとより貴族にとっては世継ぎの祖父の地位は魅力的であるし、令嬢達にとっても同様だ。王妃がお飾りで無視できると思っていればなおさらだろう。

国王の隣に立てるかもしれないというのは、抗いがたい誘惑だ。

元王女である王妃と有力貴族である侯爵令嬢の側妃という取り合わせは、奇妙なつりあいを持っていて他の令嬢の参入を阻んでいたが王妃の『脱落』でそれが崩れた。

他の者にも機会が訪れたと感じ、またブレンダへの権力の集中を厭う空気もあいまって新たな側妃をとの熱意が高まっている。

世継ぎのことを考えるなら、そして国の安定を考えるのなら新たな側妃は正しい選択のように思える。

ブレンダは確かに可愛らしくいじらしい。世継ぎの母としての身分も申し分ない。ただここにきて、ランドルフの中に王妃が無視できない存在として居座ってしまっていた。

政治的のみならず、個人的にだ。

「その話は一旦保留にしてくれ」

「承知したしました。式典の後は夜会もありますれば」

そこで令嬢達を見初めればよいと示唆され、あいまいにランドルフは頷いた。

「国内外の招待客を迎える準備は？」

「整っております。王妃様の生国の北の国からも今回は王族の方が

いらっしゃる予定ですが、到着がぎりぎりになりそうです」
「珍しいこともあるものだ。小国ながら誇り高くあまり他国には出てこないのに」
「最近は交流も盛んですし何より王妃様の縁続きですから」
王妃の親族かとランドルフは興味をそそられた。国王や王太子とは顔を合わせてはいるが、強烈な記憶はない。
式典前の慌しい空気にせかされるように、ランドルフは執務に戻った。

「陛下が新たな側妃をいうお話は本当なのでしょうか？」
ブレンダの耳に聞こえてきたのは屈辱的な内容だった。貴族の令嬢として愛想は良くしても、直情的な感情は演技のほかには出してはならない。
そう教育されてきたブレンダの心情を表すのは、テーブルの下できつく握られてたわむ扇子だけだった。
「まあ、そうなの？　でもまだ噂だけなのでしょう？」
つとめて声に不機嫌さを滲ませずにブレンダは話の主を見つめる。私的なお茶会は、親しい数人だけを集めて行われていた。仲のよい夫人や令嬢――ただ、令嬢の目の中に隠しきれない期待を見て取り、ブレンダは内心穏やかではいられなかった。新たな側妃として取り立てられるかもしれないと夢を見ている令嬢達。
自分の地位を脅かすつもり？
国王ランドルフから唯一愛されていると思っていた自信は、ここ最近ゆるぎないものではなくなっていた。

変わらず優しいのだが、以前と比べて渡りが間遠になっている。
そばにいてもランドルフはどこか上の空でもある。
王妃の話題を出すと嫌そうではあるが、無関心や流産に関しての不愉快さだけではない何かも感じる。

はっきり言えば王妃に関心を持っている。

赦しがたい事実を、違うと思おうとしていた矢先の新たな側妃の噂だ。
実家の勢力から自分がないがしろにされることはない。そうは思っていても新しい側妃にランドルフの関心と愛情が移るのは我慢ならない。
自分こそが陛下に寄り添い誰よりも近くにいるのだと思っていたのに、今になって足元がぐらつく気配がする。
王妃に加えて新しい側妃など。
国王を慕うがゆえに抑えられない不愉快な思い。顔には出さないがもう無邪気なだけではいられないことをブレンダは自覚した。
夜会では誰よりも美しく装わなければ。誰よりも陛下に相応しいのは自分だと知らしめなければ。既に用意してあるドレスにまだ手が加えられないだろうか。お茶会が終わったら早急に手直しに取り掛かろう。
そう考えていたブレンダは、常にないむかつきを感じた。

「陛下が新たな側妃をいうお話は本当なのでしょうか？」
エルマとジェーンとお茶を飲みながら話をふられたクリスティーナは、一瞬だけ手をとめた。
随分前からこの三人でお茶というのも習慣になっていた。以前は

エルマだけだったのが、ジェーンも加わり主従の垣根を越えたものになっている。
変わったことといえば他にもある。ブレンダに情報を流していた侍女はエルマとジェーンが選んだ新しい侍女に代わり、近衛は孤児院に同行するたびになんとはなくの親しみも加わって、王妃の間は氷の王妃に似つかわしくない和やかな空気に包まれていた。
ジェーンは若い娘らしく、新しい側妃の噂が気になって仕方がないらしい。

「事実であっても不思議ではないわ」

クリスティーナは淡々と言う。エルマは何も言わない。ジェーンはそれでいいんですかと言わんばかりの顔つきだ。
そんな二人にクリスティーナは少しだけ困った口調になる。

「仕方ないでしょう？　お世継ぎは必要なのだし」

年の離れた王弟や王妹はいるが、ランドルフに世継ぎが必要なのは当たり前の話で。むしろ今までの側妃が一人きりという事態が異常なのだ。

「王妃様はそれでよろしいんですか？」
「ジェーン、顔が怖いわ」

クリスティーナにたしなめられて慌てて頬に手をやるジェーンが可愛く、クリスティーナも頬を緩める。
子供達に影響されてか、城の外の空気がのびのびしているからか、クリスティーナの凍り付いて動かないのではないかと思われた無表情も最近では緩みがちだ。ジェーンなどクリスティーナの、どうにか微笑みとよべるものを目撃した日には、目と口をまん丸にしてい

つまでもそのままだった程だ。
冷静沈着を旨とする近衛も動きが止まったほどだったので、氷の王妃の微笑みにはなかなかの破壊力があるらしい。
それでも最近は慣れてきて、密かにそんな表情が見られるのが誇りであったり自慢であったりもするらしかった。

「状況を見れば当然の成り行きでしょう」
「状況云々ではなくて王妃様のお気持ちです」
「ジェーン、わきまえなさい」

エルマからの叱責に口をつぐむジェーンだが、目は雄弁に物語る。クリスティーナはそれを受け流した。長年の無表情は何を考えているのか分からないと不気味さを煽るほどに完成されていて、感情を読取らせない。クリスティーナがこの表情になると決して本心を明かすつもりがないのをジェーンも知っていて、追求を諦めた。
代わりに自分の職務を全うすることに決めたらしかった。

「王妃様、式典と夜会のドレスの仕上がりはいかがですか？　改善をご希望する点などございますか？」
「いいえ、とても素晴らしいできだと感心しているの。良くやってくれたわ」

クリスティーナから褒められて、ジェーンはぱあっと顔を輝かせた。王妃の周囲の空気をあたたかいものに変えたのに、間違いなくジェーンも一役買っている。
エルマは良い方向に変わりつつある主人を見ながらそう思う。自分しか味方がいなかった頃からすれば、まず周囲から、そして慈善事業に関心のある貴族達にと確実に王妃の影響力が及びつつある。
元から王妃としての資質は申し分ない。少しだけ氷の壁がとけたようにも思えて、そうと知った人の関心を集める。

この期に及んでクリスティーナと交流を持つ貴族はよほどの野心家か、独自の信念や価値観を持ち信頼に足る人物だ。人となりを見極めて情報と組み合わせてその中から『本物』を選び出す。

主が変わろうとしているのなら、協力する。悲しいきっかけから始まったことでも、うすうすこの先の主の意向も察してはいてもだ。

誰よりも誇り高く、誇りにしがみつかなければ生きてこれなかった主の姿は物悲しい。想いの大きさを自覚していない様子ももどかしい。

できるのはただ主の背後を守り、思う生き方のために全力を尽くすこと。長年クリスティーナの母でもあり、姉でも友でもあったエルマは、今度の式典に波乱の予兆を感じていた。

昼間新しい側妃の話が持ち上がったせいか、眠れずにクリスティーナは寝台を抜け出してバルコニーへと出た。風は冷たいが気持ちが良い。澄んだ空気に星がよく見える。

しばらくそうして立っていたクリスティーナは、背後からの足音に振り返った。いたのは夜着に暖かそうなガウンを重ねたランドルフだった。

「陛下」

「星がきれいだな。そなたはそんな薄着で寒くないのか？」

「寒さには慣れておりますので」

「そうか。――だが、随分と冷えているではないか」

頬に当てられた手の温もりに、クリスティーナは疼くような想いを抱く。ずっと与えらなかった温もりはランドルフが手を引けば、一層のわびしさを伴う。

「風もでてきた。中に入ろう」
背中に手を添えられて素直に寝室へと戻りかけ、クリスティーナは吐き出し窓のところで足を止める。
「それではお休みなさいませ」
「体が冷えたので、何かだしてくれないか？」
別れてそれぞれの寝室へ戻るとばかり思っていたのに、意外な要求にクリスティーナはランドルフを見上げた。
先に自分の寝室にランドルフを通して、飾り棚からグラスと酒を取り出す。生国の酒は度数が高く、少量なら寝酒としてもいい。長椅子に座ったランドルフのグラスに酒を注ぎ手渡した。
毒見も兼ねてクリスティーナが先に飲む。ランドルフもグラスを口に運んだ。
「美味い」
「ありがとうございます」
酒肴はさすがにないので、急に酔わないように少しずつ飲んでいるクリスティーナをランドルフはじっと見つめていた。
その視線に何か含まれているように思えてクリスティーナは何か、と小首をかしげた。
「そなたは笑いも泣きもしないが、どうしてなのだ？」
ランドルフから何故笑わぬ、と随分昔になじられた気がする。クリスティーナに関心を失う前のことだ。
優しい陛下は政略でめとった自分を、それでも大事にしてくれた。どう応えていいか分からなかったのは自分の方だ。これまでのよう

に接していたら、いつの間にか氷の王妃とあだ名され定着してしまった。
ランドルフが離れていって久しいのに、この状況はなんだろうと不思議に思える。
「泣くことも笑うことも禁じられておりました」
「誰からだ」
「父の、国王からです。わたくしは母の命とひきかえに生まれました。父は母をそれは愛していたそうで、わたくしが赦せなかったのでしょう」
ものごころ付いた頃にはもう、北の城に居場所はなかった。
たまに公務で顔を合わせても父は笑顔を向けてはくれなかった。抱いてもくれなかった。離宮で数少ない使用人と暮らし、疎まれたまま大きくなった。
年頃になり政略の駒としての価値を見出されるまでは。
「使用人にも父の厳しい目があって、離れて暮らしていても泣いたり笑ったりすると使用人が罰せられました」
何度かそんなことがあり、クリスティーナは感情を手放した。
それしか生き方を知らないのだから仕方がない。ただ、ここでは段々とそれが苦しくなり、流産で決定的になった。母親になれる。その喜びが大きかった分だけ喪失は苦しい。おまけに役立たずにもなってしまった。
泣きたいのに泣けない。泣かない。笑えない。それが自分だ。
淡々と言ってのけるクリスティーナにランドルフはしばしば言葉を失う。
自分とて親と親密だったかと聞かれると王族の常としか答えよう

がない。ただ少なくとも疎まれたり憎まれたりはしていない。
北での日々がどれほど寒々しかったのか。氷の王妃と揶揄を含んだあだ名をぴったりだと思い、クリスティーナに投げつけてきたことをランドルフは恥じた。
加えてクリスティーナが流産した時、自分はいたわりの言葉をかけるでもなく非を責めた。あの時の硝子のような眼差しが、胸をえぐる。

どちらのグラスも中身が空になり、クリスティーナは静かにグラスを置いた。

「もう遅くなりました。明日にさしつかえます」

お休みなさいませ、と頭を下げるクリスティーナをランドルフは抱きよせて、寝台へと歩をすすめる。上掛けをめくってクリスティーナを横たえた。

「陛下」
「ここで休む」
「ブレンダ様のところに」
「他の女の話はするな」

珍しく焦っているのかクリスティーナの声が上ずっている。
自分の知らない顔ばかり見せる、とランドルフは新鮮にも思う。
「わたくしに関わるのは時間の無駄です」
「私の時間の価値は私が決める」
両手で頬を包み目を合わせた。薄青い瞳が、落ち着きなくさまよう。

「――笑って見せてくれ」

大きく見開かれた目がランドルフをとらえる。クリスティーナは笑おうとしたのだろう、口の端がひきつるように上がった。

「――できません」

「そなたは不器用なのだな」

気付くまでに遠回りした。ランドルフは忍びやかに笑って唇を重ねた。

08　笑顔

夜が明けてクリスティーナは目を覚ました。温もりは夢ではなかったようだ。欲しくてたまらなかった、それでいてどう接していいか分からなかった存在が傍らで静かに目を閉じている。

なぜ自分を構う気になったのかは分からない。昨夜の国王にとっては、ここにいるのは無駄な時間ではなかったということのようだ。不思議なほどに穏やかな心持ちで、これを幸せというのだろうか。クリスティーナはランドルフを起こさないように、じっと見つめた。記憶にとどめようとするかのような、真剣な眼差しだった。

眉間にかすかに皺をよせ、ランドルフは目覚めた。腕の中には笑うことも泣くことも忘れて久しい自分の王妃がいる。

「お早うございます」

その声が甘く聞こえるのは自惚れではないかもしれない。ランドルフのものより幾分か小さな寝室は、落ち着いた調度でまとめられていた。側妃のブレンダのような華やかさはないが、品が良く繊細な印象をかもしだしている。

寝起きで少しぼんやりしていたランドルフは、そういえばと質問した。

「そなたはなぜ寝台の端で眠ろうとするのだ」

腕の力が緩みかけると、ころりと向こう向きになって体を丸める。そんなに腕の中にいるのが嫌なのだろうかとランドルフはもやもやしたまま、強引に抱き寄せて眠りについたのだった。

クリスティーナの耳がすうっと赤くなった。

「それは、わたくしの癖です。横向きだったりうつぶせで寝ることが多くて」

共用の寝室で背中を向けられていたのを苦々しく思っていたランドルフだったが、それが単なる癖だったとしたら。

昨夜の認識ではないが、本当に遠回りしていたことになる。

「陛下、そろそろ起きなければ」

式典を明日に控えて今日は二人とも忙しいはずだ。ランドルフはクリスティーナの髪を梳いて、寝台から起き上がった。

こんなに穏やかな気持ちで朝を迎えたことはなかったように思う。

「今夜は共用の寝室にきてくれ」

耳元で囁いてからランドルフは寝室をあとにした。王妃の近衛はまさか国王が出てくるとは思わずにぎょっとしていたが、悠然と前を通り自室へと戻る。

着替えや身支度をしながら何年も経っているのに、ようやく王妃の氷の壁の内側に立ち入れたような気がした。入ってしまえば王妃は感情の表し方を知らないがゆえに、仮面をつけるように装って自分を守る、そんな不器用な女性だった。

関心を示さないようでいて、こちらの様子を気にかけている。まるで――。

「猫のようだ」

侍従が独り言を発した国王をいぶかしげにうかがうが、当のランドルフは機嫌よく朝食の席についた。

クリスティーナの給仕をエルマが務めながら、注意深く主の様子を観察する。今朝、寝室から国王が出てきた際には内心で仰天した。近衛からも報告がなかったことから、国王は窓から主の寝室に入ったに違いない。

今までそんなことはなかった。二人の仲は冷え切っていて、たまに共用の寝室で過ごす程度。それも懐妊、流産からは耐えて久しかった。

クリスティーナは一見、いつもと変わりないように見える。ただエルマにはいつも以上に雰囲気が和らいでいるのが分かる。

安堵しながらも、今朝のことはすぐに側妃の耳に入るだろうと危惧していた。

何事もなければよいのだけれど。エルマは黙ってお茶を注いだ。

翌日は建国祭ということで式典が盛大に行われた。宗教関係の式典を行い、いよいよ祝賀で集まった民の前にでる時刻となる。

国王と王妃の衣装、頭には王冠と麗々しい装いでランドルフはクリスティーナに腕をさしだした。

ランドルフを見上げ、柔らかい眼差しになったクリスティーナが手をさしいれ、二人でバルコニーの端の方に進む。二人が姿を現して歓声が上がる。それにしばらくゆったりと手を振って応えていた。

国王様万歳の声が多い中、今年は高いよく通る声で王妃様万歳と聞こえてきた。

声の方を向くと、孤児院の子供達が固まって手をぶんぶんと振っている。子供の声はよく響く。小さな子供は大人の後ろだと埋もれてしまって見ることができず、またぶつかられてしまう。

孤児院の年長の子供が肩車をしたり、抱き上げたりして国王と王妃を見えるようにと頑張っていた。王妃はボブが小さな子を肩車し

ているのに気付いた。小さな子が小さな手を一生懸命に振っている、可愛い光景にふと口元が緩んだ。

「可愛らしいこと」

呟きはランドルフの耳にしか入らなかった。何気なく王妃に目を向けたランドルフは絶句した。クリスティーナが笑ってた。

そのままランドルフを見上げ、子供達の方へと注意を向ける。

「陛下、あそこに孤児院の子供達が」

ランドルフは手を振るのを忘れた。視線は王妃に固定されてしまい動かない。

まばたきすら忘れたように凝視され、クリスティーナは居心地の悪い思いをした。

「あ、の、陛下？　お手が」

「――あ、あ」

我に返ってランドルフは手を振った。横目でうかがう王妃は微笑している。

子供達と目を合わせて手を振っている様子に、人形の名残はどこにもなかった。

終了時刻になり、二人はバルコニーから室内へと戻った。窓越しにまだ歓声とざわめきが聞こえている。お茶が出され、しばしの休息に室内にほっとした空気が漂う。

「そなた、笑っていたな」

ランドルフが指摘するとクリスティーナは言われて初めて気付い

たかのように、口元に手を当てた。

「笑っていましたか？」
「笑っていた。私は初めて見たように思う」
「顔が引きつっていませんでしたか？」

少しの困惑と羞恥が垣間見える。無表情とばかり思っていた王妃が、実はかなりの表情を乏しいながら隠し持っていた。

それに気付いて優越感と共に独占欲も生じる。

——他の者にはあまり見せたくない。自分だけが発見した秘密の場所や宝物を隠す心理に似ているかもしれなかった。

「引きつってなどいなかった。——夜会にはそなたの国から兄上がやってくるだろう」
「まあ、ずっと顔を合わせていませんでしたので楽しみです」

また、王妃が変わった。『嬉しい』や『楽しみ』などの感情を示す単語がするりと出るようになった。直前で切られると取り付く島がないが、楽しみですと続けられると共感しやすい。

孤児院で人として生きる力がほしい、子供達から学んでいると言っていたのが身に付いたというところか。

別の意味で危ないが。

ランドルフは落ち着けと時間をかけてお茶を飲み干した。

招待客との昼食やお茶会を挟んで午後の時間は過ぎていき、いよいよ夜会が始まろうとしていた。

クリスティーナの王妃の間ではエルマとジェーンが最後の仕上げをしている。複雑に結い上げた髪の毛に、王冠の中央にはめこまれた宝石とそろいの耳飾り。ドレスは首元と腕を繊細なレースが覆っ

ている。

「どうかしら」

「お綺麗です」

エルマは満足そうに頷き、ジェーンはいい仕事をしたといわんばかりに感激している。

クリスティーナも鏡で自分の姿を確認する。

ありがとうと感謝の念を述べて、夜会の広間へと移動を始めた。

昨夜から、いや一昨日から夢のようだ。ランドルフの目には慈しみと熱があって、それが自分に向けられている。今までのような無関心か、氷の王妃と冷ややかによこされる目線とは明らかに違う。

何年もここにいたのに、ようやく居場所が定まったような気がした。ここにいてもいいのだろうか、からここにいたいと思えるようになった。

胸があたたかい。手足も冷たさで凍えて縮こまることもない。

広間へ向かうクリスティーナの足取りは軽やかだった。

側妃の部屋では戦争のような騒ぎだった。

「これじゃないわ。あの髪飾りにして。花はこちら。口紅の色も合わせて」

ブレンダの次々におこる細々とした要求に、侍女が忙しく立ち働く。

きつい口調になるのは夜会の時間が迫っているからで、——けして二晩続けて王妃のところに渡った話を聞いたせいではない。

ブレンダは誰よりも美しく豪華に装うことに腐心した。衣装も何着か作らせていたものに手を加えて宝石を縫いつけ、宝飾品も城に

宝石商をよびつけて実家の財力にものを言わせて買いあさった。
念入りに化粧を施し、ブレンダは鏡の中の自分に満足する。
ドレスも宝飾品も誰にも負けない。ドレスに合わせた靴を履く。踵を高くして足を長くみせる効果を狙う。踵は高くなければドレスを引きずってしまう。
鏡の中で角度を変えながら、おかしなところがないかと調べる。

自分でも満足し、侍女からも賞賛をうけてブレンダは立ち上がった。その姿は華と呼んでさしつかえないほど美しいものだった。瞳は異様な輝きを帯びているし、興奮をあらわして頬は上気している。
これなら、と思う。陛下のお心をとらえるに違いない。
それに切り札もある。もう他に陛下の関心がいくはずもない。
今夜の夜会の主役になるのは自分だ。
仕上げに振りかけた香水に、やや気分を害しながらブレンダは歩き始めた。

ランドルフは扉の前に立って自分を待つ王妃に感嘆を禁じえなかった。
式典の衣装も清楚で日差しに映えるものだったが、夜会の衣装はレースで覆われた首と腕が一段とほっそりと見せて優美だ。手を差し出しながら素直に賞賛する。

「綺麗だ」
「ありがとうございます。陛下も、ご立派です」
重ねられた手に力を入れる。二人ともに前を向く。
扉の向こうが静まり返った。重厚な扉が開かれて国王と王妃はきらびやかな明かりと人いきれの中へと漕ぎ出していった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4490z/

氷の王妃

2011年12月29日07時13分発行